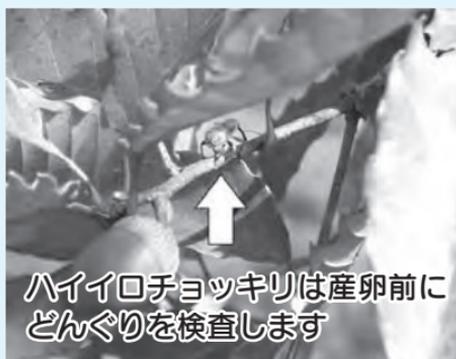


2012年冬。これまでにない市街地でのツキノワグマの出没が相次ぎ、結果として罠に入った子グマ1頭を殺処分することになってしまいました。このことを受けて、私はどんぐり豊凶調査を2013年から行っています。それは、クマが森の豊かさの象徴とされる一方で人との軋轢あつれきが問題となっている野生動物であり、越冬や出産のため秋に実るどんぐりが重要な食糧であること、豊凶が早めに分かればクマの出没を予測し「ゴミは朝出す、果実は収穫する」といった人への注意喚起ができます。また、こうした行動が人とクマの命を守ることに繋がると考えたからです。

調査の中で、結実した全ての実が熟れる訳ではなく、さまざまな原因で初夏から未熟な実が落下し始めることがわかりました。その原因の1つにハイロチョッキリという昆虫の存在があります。このチョッキリは未熟な実に産卵し



ハイロチョッキリは産卵前にどんぐりを検査します

た後、地面に枝ごと切り落とす習性があり、その理由として成長したイモムシが土の中で蛹さなぎになるため、卵に影響が出ないように実の成長を止めるため、野生動物に実を食べられないためなどいくつかの説がありますが、どの理由も子孫を残すための戦略です。その行動を観察すると、産卵前に子どもを安心して託せるかを確認するかのように、実や切り落とす枝の部分を入念に歩き回っていました。この行動を目にするまでは、チョッキリが切り落として森に響く「ガサッポトツ」という音が物悲しく聞こえていましたが、「いい実を見つけて産卵できたのだな」と何とも言えない複雑な気持ちになりました。一方、秋に熟したどんぐりの実は、地面に落下し、根を張って冬を越します。乾燥や寒さに耐え、野生動物にも利用されず生き残った実だけ春に芽吹くチャンスがあります。森では、私の気持ちに関係なく、さまざまな命がせめぎ合い、つながりを持って成り立っています。

調査の目的は、実の状況を知り人の意識や行動を変えることでしたが、どんぐりを中心とした森の生態系を自分の目で確かめたことで、「自分の目で見て感じることの大切さや、継続していくと必ず何かにつながる」と改めて考えることができました。子ども達に伝えることは、いつも自然が教えてくれています。

さあ、春が来ます。調査を踏まえた行動を続けようという気持ちで私も春を待っています。(加瀬澤)